初回授業の実践例、授業の工夫点の紹介
－都市教養プログラムおける実践例－

オープンユニバーシティ・准教授
樋口　貴広

はじめに：多人数参加授業への対応

2009 年度より、後期木曜 2 限開講の都市教養プログラム「認知と行動」を担当している。研究上の専門である心理学・認知科学的な内容をベースに、身体運動や行動科学のエッセンスを加えた講義内容となっている。

2009 年度は 588 名の履修登録があった。この登録人数は当初の予定を大幅に超えるものであり、「出席管理に基づく成績評価」など、シラバスに事前に記載していた授業の遂行が困難となった。こうした問題に対して適切な対応とは何かを模索するのに多くの時間を割くこととなった。そこで以下では、本セミナーの主テーマである初回授業の工夫に加えて、多人数対応として実践したことや感じたことについても報告したい。

初回授業の役割

本授業では、2 つのことを「初回授業の役割」と位置付けた。

1．講義内容の視覚化
2．成績評価方法の明示

この２つの目標は、シラバス作成の際にも求められる内容であり、それ自体が初回授業に特化した役割というわけではない。しかしながら、学生によってはシラバスに記載した内容を全く異なるものとして認識していた、といったケースも散見される。従って初回授業では、シラバス上で表現していることを口頭で明確に説明することで、学生の正しい理解を促すということを、重要な役割として位置づけた。

講義内容の視覚化

日常の学生との交流の中で、「シラバスは好印象だったが、初回授業を受けてみたら期待と異なっており、別の講義を受講することにした」といった生の声を聞くことも少なくない。初回授業の内容に基づく学生のシビアな受講判断は、2010 年度に 45 分の初回オリエンテーション授業が施行されれば、ますます多くなると予想される。せっかくシラバスを通して授業に興味を持ってくれた学生に対して、授業の面白さや魅力をコンパクトに、わかりやすく伝えることが、初回授業の最重要課題であると考え、様々な意味での講義内容の視覚化を試みた。

第１に、講義名「認知と行動」を具体例に置き換える作業をおこなった。一般に、教養科目の講義名は抽象的なものが好まれる。様々なトピックスを包括できることや、担当教員の変更の影響が少ないといった様々な利点がその背景にあるだろう。しかし学生にとってみれば、こうした抽象的タイトルは授業内容の直観的理解を促さないため、初回授業を通してその意味を解説する必要がある。

解説の方法として、「認知とは」「行動とは」といった定義を明確にするといった方法がある。しかし本授業ではこうしたオーソドックスな説明は第２週以降にとっておき、初回授業では、２つの単語の内容を説明しうる授業内容で、かつ、多くの学生が興味を持てる話題で置き換えることにした。

具体的には「パントマイム」のトピックスを取り上げた。パントマイムでは、実際には存在しない物体があたかも実在するかのような錯覚が生じる。その背景にある“認知”的なプロセスを知ることは、学術的にも興味深い。またパントマイムの場合、錯覚を作り出すのがパフォーマーの優れた身体“行動”であることから、そこからも興味深い話題が提供できる。初回授業では、映画の予告編をイメージしつつ、パントマイムの授業に関する魅力をコンパクトに伝え、「第 2 週に詳しく解説するから、興味があればぜひ参加してほしい」と促した。

第２に、パントマイム以外の授業についても、シラバスに記載した各回の授業内容を具体的事例に置き換えた。たとえば、シラバス上では「発達の認知科学」、「感情の認知科学」と表現したものを、それぞれ「子供の早期教育は本当に特か？」とか、「心の緊張により失敗するメカニズムは？」など直観的に理解できる話題に結び付けて

紹介した。

限られた時間のなかで講義の内容を効果的に伝えるには、全体の概要から各論に移るトップダウン的な講義よりも、具体的・直感的エピソードを先に提示するボトムアップ的な講義のほうが、少なくとも高校を卒業したばかりの大学1年生には効果的に伝わるのではないかと考え、初回授業において意識した。

成績評価方法の明示：シラバスの記載内容から変更するための対応

予想を超える大人数の参加が見込まれたことから、シラバス上に記載した「出席管理に基づく成績評価」が現実的でないと判断し、出席管理に依存しない評価に切り替えることにした。われわれ教員はFDセミナー等を通して、シラバスに記載した事項の重要性を理解しており、シラバスに基づく授業の展開や成績評価をおこなうことを常に意識している。そのため、シラバス記載の成績評価方法を変更することには、それに伴うトラブルが起きないよう、十分すぎるほど慎重な対応が必要と考えた。

そこで、評価方法の変更に関する通知と同意書を作成し、シラバス記載の方法から成績評価を変更することに事前に同意した学生が、授業を継続して受講しているという体制を整えた。同意書の回収率を上げるため、同意書提出者の成績に加点することにした。その結果、同意書提出者は514名と、履修登録者の9割近くに達したため、この方法は有効であったように思われる。

多人数参加への対応に伴う諸問題

500名を超える授業の対応はこちらの予想を超えて困難なことが多く、授業準備、授業の進行、成績評価など、多面的にその対応に苦慮した。授業準備については、教室と居室が物理的に遠い位置にあるといった個人的事情も重なり、膨大な配布資料やパソコン等、10Kg 近い荷物を両手に抱えて教室に向かうのは、特に悪天候時にサポートが必要と感じた。また授業中の騒音は、常に頭の痛い問題であり、期末の学生評価においても、こうした騒音に対するクレームが非常に多かった。

成績評価として半期 2 回のレポートを回収したが、1回のレポートを読んで評価する作業だけで、実労 43 時間近い作業が必要となった（中間レポート提出者518名に対し、各レポートの評価所要時間を5分として算出）。この上に成績の記録や集計、ミスがないようにダブルチェックするといった作業が続くことから、これら一連の作業を真面目におこなうと、単一の教養授業の実施だけに多くの労働時間を費やすこととなり、好ましい授業環境とは言えなかった。

多くの学生にとって魅力的と評価してもらえるよう、授業内容の充実に最善の努力をしつつも、適切な学生数に抑えるための何らかの対策を講じる必要性を感じた次第である。